

ヘンリー・ジェイムズ『信頼』

水野尚之

第十五章

いずれにしても、ゴードンが去った、これを最後に去って戻ってこないとなった今、バーナードは突然奇妙な自由の感覚を持った。それは果てしなく広がっていく感覚であり、考えられるいかなる原因ともまったく釣り合わない、と彼はひとりごとを言った。突然すべてが彼の自由な選択に任されてしまったように思われたが、自分の自由をどうしたらいいのか彼はまったく途方にくれてしまった。菓子屋に住んでいる女性たちを午後また訪問しに行くことは、その自由の使い道としては害がないように思われた。しかしここで彼は、ゴードンが残っていた状況に新たな困惑の要素をもたらすような歓迎を受けた。その戸は黒い森シュヴァルツヴァルトのたくましい娘であるヴィアン夫人の小間使いによって開かれた。彼女は、大変申し訳ありませんがご主人さま方はどなたにもお会いできません、と言った。

「大変お忙しいし、お加減がよくありません」その若い女性は、説明として言った。

バーナードはがっかりして、この言葉について議論しなくなった。

「まさか」彼は言った。「加減が悪くて忙しいはずはない！ 言い訳をする時には、それがお互い矛盾しないようにすべきだね」

ドイツ人の小間使いは、戸を開いたことで見えるようになった青空に、その青く丸い目を一瞬凝らした。

「旦那様、私に言えることを言っているだけです。私がフランス娘ほど賢くなくても、私のせいではありません。ご主人様のうちのお一人が忙しく、もうお一人のお加減がよくないのです。ちゃんとご説明いたしました」

「ちゃんと、ではありません」バーナードは言った。「三人おられることを忘れてはいけません」

「ああ、小さい方、あの方は泣いておられます」

「エヴァーズさんが泣いているだって！」バーナードは大きな声を出した。あの若い娘が泣いている姿など、彼にはこれまで想像もできなかった。

「ご不幸の時には、お嬢さんたちはそうしておられます」娘は言った。そして素朴だが意味ありげな微笑を浮かべて、広い胸の左側に大きな赤い手を置いた。

「彼女が不幸なのは残念です。でも他のご婦人たちのうちのどちらのお加減が悪いのですか？」

「お母様は大変お忙しいです」

「そして娘さんのお具合がお悪いと？」

若い娘は一瞬彼を見て、ふたたび微笑んだ。彼女の小さな青い目の光は混乱を表していたが、困惑を表してはいなかった。

「いいえ、お母様のお加減がよくありません」彼女は声を上げた。「お嬢さんはとてもお忙しいのです。バーデ

ンをお発ちになる準備をされています」

「バーデンを発つだつて？　いつ行かれるのです？」

「詳しくは存じませんが、旦那さま。でも、まもなくです」

この情報を得て、バーナードは立ち去った。彼はかなり驚いたが、ヴィヴィアン夫人がウース川の河畔で過ごすと言っていたわけでもないとか、年中誰かがバーデンを離れていく、とも思った。晩になって彼はクワハウスでラプロック大尉に会った。大尉は悲しみがはちきれんばかりの姿でうろついていた。

「畜生、あの人たちは行ってしまふ。行ってしまふんだ」二人の若者が最近のできごとについて二、三言葉を交わした後、大尉は言った。「こんな心無いやり方で我々から去っていくなんて！　立ち去る時期じゃないよ。とにかく幸運にも部屋が取れたら、部屋を押さえ続ける時期なんだ。来週競馬が始まり、人がどつと押し寄せるぞ。大公やら皇子やらがみんなやつてくる。エヴァーズさんが大公にひどく会いたがっていたので、彼女に紹介すると約束したよ。ヴィヴィアン夫人が何をしようとしているのか僕には分からない。十ポンド札を賭けてもいいが、彼女は追いかけてようとしているんだ。あのライト君が戻ってきてまた行ってしまったのだろ。ヴィヴィアン夫人はテントをたたんで追いかけるつもりさ。彼をきつと捕まえるぞ。そうしないわけないさ！」

「彼女は君という危険な男から逃げようとしているんだよ！」バーナードは言った。

「つまりエヴァーズさんのために、かい？　そうだな、エヴァーズさんを崇拜しているよ。そう認めても構わない。でも僕は危険な男じゃないよ」ラプロック大尉はどんよりした目で言った。「ポケットに十シリングもない奴がどうやって危険な男になれるんだ？　やけっぱちになって、とでも？　でも僕が聞いているところでは、エヴァーズさんにもお金がないよ。君に聞くつもりはないが」ラプロックは続けた。「彼女にお金があるうとなか

ろうと、僕はまったく構わない。彼女は怖ろしく魅力的な娘さ。参ってしまったと君に言ってもいい。僕に勝ち目は無い。自分に勝ち目は無いことは分かっている。ヴィヴィアン夫人は僕につらく当たるが、まあヴィヴィアン夫人の方が正しいだろう。金のかかる趣味があつて遺産がない若い女性に対して、僕なんか夫として選ばれるわけがない。ゴードン・ライトこそ望ましい若者つてわけだ。ヴィヴィアン夫人がゴードンを自分の娘の相手としてそれほど望んでいないとしても、きっと彼女はエヴァーズさんのために彼を捕まえようとするぞ。畜生、僕を遠ざけておくために、彼女はゴードンを二つに切つて、二人の娘に半分ずつ与えるだろうよ！僕はあの婦人が怖いんだ。ねじ回しの音みたいな声だし。でも、いずれにしても、このいまのままい場所を離れることができたとしても、あの娘の姿が見られるところにいるつもりだ。そうしないでおくものか！競馬はやめるよ。やめなかつたら首をやるよ！でも僕は質に入っている、それがどういふ意味か君に分かればだが。宿屋にひどい借金があるから、あの厚かましい乞食野郎の亭主が僕を目の届かないところにやらないだろう。あの汚らしい賭けテーブルでは、運は僕を見放している。この三週間というもの、一ファージングも勝つていない。先日兄に手紙を書いたら、今朝返事が来た。いまいましくもつたいぶつた忠告の手紙で、もう七回も僕の借金を払ったのださ。七回はないさ。たつた六回か、六回半だ！僕に残りの人生をオランダ亭で過ごしてほしいんだらうか？たぶん兄は、僕にそのウェイターになつて、定食を給仕して借金を完済してほしいんだらう。七人の娘と二人の家庭教師と一緒に次にやつてくる時、兄にはその方が便利だろう。あいつらのひどい定食の臭いが大嫌いだ！僕が金に困つていて哀れに思つてくれるかい？本当にありがとう。何か手助けしてくれるかい？ねえ君、君がお金をあたり中に撒き散らそうとしても、僕は君を止めるような人間じゃないよ」昨夜大金を稼いだことは、諺にあるように、バーナードのポケットを焦がして穴を開けようとしていた。一万フランが彼にとつて

これほど重荷に感じられたことはなかった。運に恵まれない友人に五十ポンド貸してやることで、自分の幸運の重さを軽減することは、彼の優しい気質を満足させるだけでなく、彼の良心に強く訴える行爲だった。しかしながら彼の良心も条件を課した。「ねえロングヴェイル君」ラブロックは続けた。「僕はいつも、家族への思いやら昔からの付き合いやらそんな類のことを大事にしてきた。だからラブデイルに打ち明ける気になったんだ。誓って言うが、君は善きサマリア人か^⑤そんなような人を思い出させるよ。実の兄より君は僕のことを大事に思ってくれよ！　ありがとう、喜んで五十ポンド受け取らせてもらう。できるだけ早く返すよ。僕の都合がつき次第、それでいいだろ？　畜生、今回は都合がいいよな。君の条件を出せよ。僕は先にその条件を受け入れるよ。エヴァーズさんを追いかけまわさないこと、それが君の条件か？　僕に金を払って追い払ってくれと、あの家族に頼まれたのかい？　僕が貧乏なのを利用するとは、ひどく残酷だな！　僕は貧乏だけど正直だ。だが僕は本当に正直なんだ、ロングヴェイル君。それが大事なところだ。君に約束するし、約束を守るよ。もう二度とあの娘に近づかない。君に五十ポンド返すまでは、彼女のことを考えない。恐ろしく金を使ってしまいがちだが、それが君の仕事だ。あの忌々しい競馬のために僕はここに残る。だからあの若い娘は安全だよ」

翌朝ロングヴェイルはヴィヴィアン夫人を訪ね、三人の女性たちが二、三時間前に早い便でバーデンを發つたことを知った。この事實は、彼の心に様々な感情——驚き、苛立たしき、困惑——を引き起こした。彼女たちが發つたのは当然だと考えようと努力したが、彼らの去り方には何か早計で説明のつかないものがあると彼には思われた。そしてあの一行のうちの少なくとも一人は、彼にさよならを言う機会も与えなかったという点で、思いやりに欠け無作法だと自らに言い放った。その後の三、四日の間に、これまでもそうであったようにはっと立ち止まって、自分はアンジェラ・ヴィヴィアンにひどいことをしたのだろうかと自問する様を予測する時にはい

つも、彼はいわばそれを見越してこの考えに逃げ込んだ。答えが手近に用意されていない以上、これは無駄で非実際のな問いだった。とはいえ、彼女は、魅力的な点はたくさんあるとはいえ、ぶつきらぼうで気まぐれな若い女性だと、疑問符を付けずに言うことは、実に簡単で決定的なことでもあった。問題の三、四日間、バーナードはバーデンでぶらぶらした。何をすべきかどこへ行くべきかよく分からず、動機が蓄積するのを抑える突然の制止——一種の精神的な肘鉄砲——を受けたかのように感じていた。バーナードが毎日会っているラブロックも、エヴァーズ嬢と最後に会うという満足を得られなかったわけで、運命が自分の顔をぴしゃりと叩いたと感じているようだった。

「きっと彼女は僕に手紙を書いてくれている、と思った」大尉は言った。「でもどうやら彼女は手紙を書かないらしい。手紙を書かない娘もいるしね」

ブランシュ嬢から何か知らせがあるかもしれないさ、とバーナードはラブロックに言った。そして彼はバーデンを離れる前に、彼女が哀れな若者にローザンヌから魅力的なちよつとした手紙を書いたことを知った。三人の女性はバーデンから離れてそこに立ち寄り、ヴィヴィアン夫人はしばらくそこに留まると決めたそうだった。

「彼女が手紙を書いてくれてまったく嬉しいよ」ラブロック大尉は言った。「手紙を書く娘もいるよね」

ブランシュは、バーデンの後ではローザンヌはまったくひどいと思ひ、バーデンの楽しみを思い焦がれた。しかし今のところバーデンの楽しみは、彼女の文通相手の目に入らなかつた。彼はバーナードの五十ポンドをクワハウスに持っていく、そこに置いてきたのだった。バーナードは大尉の不幸を知り、また五十ポンド貸してやったが、大尉はまた二回目の実験の失敗をした。我々の主人公は、不運な友人に自分の勝ち取った儲けの全額を回

してやるまで気が落ち着かなかつた。そしてその金は最後の一ペニーにいたるまで、ラブロック大尉の指を通して銀行に向かった。この過程が終了すると、バーナードはバーデンを去つた。大尉が暗い顔をして駆までついてきた。

バーナードには奇妙な自由の感覚が訪れた、と私は述べた。この自由のひとつの使いみちとして、彼は長い旅行に出た。彼は東洋に行き、ヨーロッパを二年以上留守にした。彼の人生の中のこの時期については、全部を物語るつもりはない。東洋は素晴らしいところであり、アジアの神秘を探りながら、バーナードは実にたくさんの奇妙で美しい事物を目にした。彼は強烈な喜びの瞬間を味わつた。様々な印象を蓄え、かなりの知識も養つた。とはいえ彼は、何か特別な満足感をもつてこのエピソードを思い返すような運命にはなかつた。予想されたほど愉しいものではなかつたし、思つたほどくはいかなかつたのだ。愉しみの杯がいかなる不思議な要素で美味くなくなつたのか、言おうとしても彼は言葉に窮しただろう。しかしその杯を、美酒として飲み干すのではなく、時々薬として彼がすすつたことも疑いえない事実である。人々が彼の世界を見る機会を祝い、世界をそれほどたつぷりと見ることできた彼の特権を羨むと言つた時、彼は、運は分割払いをするほど人間を嫌つていと仄めかされたことから受ける通常の苛立ち以上のものを感じた。間違つた共感ほもつとも扱いにくい贅沢であり、世の中にははずいぶん見当違いもあるものだ。とバーナードはこの時は思つた。しかしながら彼は、東洋旅行を樂しめなかつた以上、その罪は自分にあるとすぐさま認めただろう。もつとも、罪がこれほど意図的でなかつたことはないという心地よい思いも内心しただろうが。もし、私が語っているこの時期に、彼の生来の快活さが陰気なものになつていたとしたら、彼が最近会つていた人とのつきあいをできなくなつたという事実とその説明の一部を見出しうるだろう。ゴードンが突然バーデンを去つて以来二人の若者は会つていない、というのも奇妙な

状況だった。ゴードンはベルリンへ行き、その後すぐにアメリカへ行った。かくして二人は地球の反対側にいるのだった。ゴードンが母国に帰る前に、バーナードは二、三度手紙で、ヨーロッパのどこかで会おう、君の都合のよいところで、と誘っていた。ゴードンの答えは、自分の行動は非常に不確定であり、バーナードに後を追わせるのは忍びない、というものだった。ベニスからバーデンに来てもらうという面倒を一度かけており、そのような好意は、いくら親友の間柄でも一回に一度であろう。もちろんバーナードは、アンジェラ・ヴィヴィアンについて彼がゴードンに語ったことが、このような事態の、つまり二人のような親友の場合には疎遠になったに等しく見える事態の、本当の原因ではないかと思っていた。ゴードンは彼女を諦めていた。しかし彼は、彼女のことを悪く言ったことでバーナードに恨みを抱いていた。そしてこの不快な印象が続いている限り、彼はバーナードに会いたくないのだ。バーナードは、君はまだ恨んでいるのか、それももつとだが、と哀れなゴードンに率直に聞いてみた。しかしゴードンはそれを否定し、自分が見たところでは、彼らの親しさが薄らいだとは思えないと言った。彼はただバーナードに、好意としてそして「妥当な感情」に対する配慮として、ヴィヴィアン嬢のこともバーデンで起こったことももう話題にしてくれらなと頼んだ。この願いを聞き入れるのはたやすかった。そしてバーナードは手紙では厳密にこの要求に従った。しかし彼には、そうするという行為そのものに冷却作用があると思われた。自然な話題を避けるという合意以上に、いわゆる「緊張」を証明するものがあるか。バーナードはゴードンの「妥当な感情」について少し考えてみた。そしてあれほど正直な性質の男にとって、ひねくれた怒りの存在は、心理学をかじったことよって得られた事実だった。しかしながら彼がこの事実につねに自分の意識の前景を占めさせた、とは言えなかった。バーナードは幾人かの偉大な画家に似ていた。彼の前景は実にたくみに配されていたのだ。ヴィヴィアン夫人と娘については、イタリアへ行ったという噂以上のことを彼は

聞かなかつた。そしてどうやら信用できそうな筋から、ブランドシュ・エヴァーズが母親とともにニューヨークに帰つたと聞いた。ラブロック大尉はまだオランダ亭で借金に苦しんでいるのだろうか。ゴードンにひどいことをしたのではないかと彼がそれほど気に病んでいないとしても、すでに述べた他の疑問に彼がふたたび取りつかれていたとは言つてもいいだろう。アンジェラ・ヴィヴィアンにひどいことをしたのだろうか、彼がそんなことをしたのを彼女は知っているのだろうか。こう問うても、彼は決してみじめな気持ちにならなかつたし、寝入りばなにいつも考えさせられるわけでもなかつた。とはいえこの問いは折々彼に浮かび、時として実に奇妙な場所である——インドの寺院の静寂の中で、東洋の群集のかん高いにぎわいの中で突然に唐突に——彼に訪れた。とうとう彼はその問いに馴染み、それをびっくり箱と名づけた。何か目に見えない状況の手がバネを押すと、小さな人形が飛び出して彼をまっすぐに見つめ、にやにやと尋問するのだ。この現象をまったく無意味なことと思ひ、バーナードはいつも蓋をびしゃりと閉めた。しかしこの現象が、ゴードンのことを思い出すと感ずる良心の痛みよりも頻繁に起こつたとしても、良心の痛みは、優れた友人ゴードンが結婚しようとしているという噂にとうとう接した時には、深い悲しみとなつた。噂はアテネにいる彼のもとに届いた。曖昧で間接的であり、婚約者の名前もわからなかつた。しかしバーナードはその噂をよい風に解釈し、友人が元氣を取り戻し結婚したいと思ふようになったのだと考えて氣を樂にした。

第十六章

我々の主人公が遙か東洋から戻りパリに着いた時に、私が今述べた噂がやつとかなりの一貫性を持つものと

なった。実際ここに至って、その噂は信頼できる情報という形を取った。銀行で彼を待っていたたくさんの遅れた手紙の中に、彼はゴードンからの手紙を見つけた。ここ一、二年の間に、この信頼できる——そして信頼してくれる——友人との文通は頻繁なものではなく、バーナードは彼から直接知らせを受けることはほとんどなかった。放浪している間に、三、四通の短い手紙を受け取っていた。以前の几帳面な手紙のように、長くはないが見たところ心のこもった手紙だった。バーナードは、それらの手紙に心がこもっていると自分を納得させようとした。公平な疑いというはかりでそれらを量ってみた。概してゴードンの手紙の口調にはゆるんだところがないように見えた。もしゴードンが前より手紙を書かなくなっているとしたら、それは人が年を取るにつれてよく見かけることだ。さらにいえば、親しい友人たちの付き合いはいろいろな局面や季節や中断や復活があり、実際たどえ友人が相手から顔をそむけたとしても、それは単に周期的な変化が起こっただけのことで、しかるべき時期が来ればまた二人は顔を合わせることになるのだ。バーナード自身は、まずまずの頻度でしかも十分親しみを込めて手紙を書くようにした。良心の問題と考えていて、自分はゴードンを寛容に扱っており、目には目をという態度ではない、と思いたかったのだ。パリで彼が受け取った手紙は短いので、ここに全文を紹介しよう。

「親愛なるバーナード、他の誰よりもまず君に手紙を書かねばならない。もつとも、残念ながら君ははるか遠くにいるので、僕にお祝いを言ってくれる最初の人にはなれないがね。しかし最後の人にはならないようにしてくれたまえ。僕は結婚する。できるだけ早く。相手の若い女性は君が知っている人だ。だから事態は理解できるだろう。三年前にバーデン・バーデンでよく会っていたあのブランシュ・エヴァーズを覚えているだろう。もちろん君は覚えているさ。君がよく彼女と話をしていたのを僕は知っている。たぶん君は、僕が彼女を人生のパートナーとして選んだことに驚くだろう。でも僕たちは、見識をもってこれらの問題に当たるのだ。

僕は彼女を非常に愛している。これは素晴らしい理由だと思う。この一、二年というものは、誰か単純で信頼してくれる子供らしい人をいつでも恋する準備ができていた。この魅力的な若い娘には条件が完璧に備わっている、と思う。実に自然で新鮮な人だよ。魅了されたくない、自分が結婚する女性を科学的に評価したい、と以前君に言ったことを覚えていて。それはもうまったく克服した。そんなたわごとを自分がどうして言うようになったのかわからない。今僕は魅了されているし、本当にそれが好きなんだ！一番良いところは、僕がブランシユを評価するのにそれが少しも妨げにならないことだ。僕は彼女を非常に公平に判断している。ありのままの彼女を見ている。彼女は単純だ。それが僕の望むところだ。彼女は優しい。それが僕の欲しいものだ。彼女がどれほど美しいか君は思い出すだろう。そんなことは君に思い出させるまでもあるまい。あの時の彼女はずっと若かったが、ここ二、三年で大変大人になり向上したんだ。しかし彼女は常に若く無邪気なままだろう。彼女にあまり向上してほしくない。我々がバーデンで会ってから、彼女は母親と冬にアメリカに帰った。しかし僕は三ヶ月前まで彼女とふたたび会わなかったんだ。その時、僕は彼女を新しい目で見た。そして自分がどうしてこれほど盲目でありえたのだろう、と思ったのさ。とはいえ、その時まで僕は彼女に対する準備ができていなかった。そして今の僕がこれほど幸福なのは、経験によって現在の感じ方に至ったことを知っているからだ。それが僕に自信を与えている。僕がやはり理性で話す人間だと君は分かっただろう。もっとも、理性はあっても魅了はされているよ。一月以内に結婚する予定だ。結婚式には戻ってくるようにしてくれ。ブランシユから君に伝言がある。一語一句伝えるよ。「私はバーデンにいた時のような馬鹿なおしゃべりじゃないって、彼に言ってください。ずっと賢くなりました。アンジェラ・ヴィヴィアンと同じくらい賢いわ」君がヴィヴィアン嬢のことを非常に賢いと思っていた、と彼女は思っているんだ。しかしブランシユが同

じくらい賢いというのは正しくない。僕はとても幸福だ。アメリカへ見に来いよ」

バーナードは帰国した。しかし真夏に行なわれたゴードンの結婚式に間に合うようにはアメリカに着けなかった。秋の遅くに戻ったバーナードは、結婚後数ヶ月の友人に会い、友人の招き通り彼が幸福に見えるかどうか判断することができた。私が今引用した手紙が与えた最初の印象は大変な驚きだった。第二の印象は、驚きをまったく否定するような考えの連続だった。そしてバーナードの心のこうした動きは最後には溶け合つて、愉快という単純な感情になった。ゴードンが結婚することを彼は喜んだ。愉快に思った。彼が誰を選んだかという問題には、ほとんど関心を持たなかった。たしかに最初は、ブランシュを選んだのはまったくつじつまが合わないように見えた。あの元気のいい頭の空っぽの浮気娘以上に、ゴードンの厳しい要求を満たすのに不向きな女性を想像つだった。ブランシュ・エヴァーズは可愛い馬鹿娘だった。たぶんもつとも可愛い、そして疑いなくもつとも愛すべき馬鹿娘だった。しかし彼女は、人の責任についての自分の考えを妻に共有してほしいと望むような、異様なほど真剣な男にふさわしい相手ではなかった。何という奇妙な選択、なんとこの奇妙な熱中であることか！このように批判しようとして、バーナードはすぐにやめた。誤りが愚直な域にまで行なわれたと突然意識したからである。ブランシュ・エヴァーズはまさに、ゴードン・ライトのような種類の男がきまつて恋してしまう類の娘であり、哀れなゴードンは、アンジェラ・ヴィヴィアンとの快適な人生という難問を解決しようとしていた時よりも、今回の方が自分がしようとしていることをはるかによく分かっている、とバーナードは声を上げた。これこそ強くて堅実で分別のある男たちが常に至るところだ。彼らは特にこの件では、純粹な空想の女神をいつも求めると思われている人々よりも、空想に大きな貢ぎ物を捧げる。ブランシュ・エヴァーズはフランス人が空想

物と呼ぶものであり、ゴードンは彼女が素晴らしくも無能だとわかつて喜んだのだ。彼は他のところで有用性を養ったのであり、彼は、精神的に言つて、自分には子猫のような妻を持つ余裕があると思つて嬉しくも得意にもなった。彼は自分の中に引き出せる良識の蓄えがあり、それゆゑ知恵の鑑を娶ることは、泉に水を運んでいくにすぎなくなるだろう。彼は頭の少し足りない妻の欠陥を容易に補うことができるだろう。そして彼女が彼を魅了し楽しませてくれたなら、それらの魅力に対する感覚の贅沢を自分に贅することができることになる。それによつて破滅させられるという心配は少しもない。たとえブランシユの鳥のさえずりのようなおしゃべりや顔の向きが彼をからかったとしても、彼はそれを熟知して、ただ自分の権利に陣取ればいいのだ。誰にも小さな花壇を持つ権利がある。そして人生はすべてが単なる菜園ばかりではないのだ。友人が与えた驚きについて、バーナードは急いでこのように大雑把な説明を考えてみたが、この説明で当座の必要には十分と思つた。彼はブランシユに楽しい手紙を書いたが、彼女は意気盛んで礼儀正しい返事を書いてきた。彼女の返信は実に美しく書かれており、それを二、三回読み返しなが、彼女を公平に評してみ、ここ二、三年の間に彼女は知性を少しは磨いたといつてもよいかな、とバーナードは独りごとを言つた。歳を取るにつれて、彼女は賢くならざるをえないわけだ。苦しみの教育として知られる類の経験によつて彼女は学んだのかもしれない、とさえバーナードは思つた。ラブロック大尉と、ユーモラスな時期の俗語として表現されてはいたがそれでも純粹そうに見えたあの恋心はどうなつたのだろう。二人は賢明な保護者たちによつて永遠に分けられてしまつたのだろうか。彼女は彼の面影をその軽やかに鼓動する心から消し去らざるをえなかつたのだろうか。バーデンではバーナードは次のことを確信していた。その軽蔑に満ちたそぶりと、私を征服するのは難しいという生意気な意識——可愛いアメリカ娘は、若い娘が最高の地位を占めている文明への忠誠をそうすることで証明しているのだ——にもかかわらず、ブ

ランシユはあのハンサムなイギリス人を高く評価しており、もしラブロックが彼女の魅力を享受し続けていれば、彼女の方からの反応という見返りも期待できるのではないかとバーナードは確信していた。しかし、ラブロック大尉にはたぶん誠意がなかったのだ、少なくとも、運に見放され、兄も人情に欠けていたので、オランダ亭（そこで大尉は、数ヶ国語を話す給仕の仕事をまじめにこなすという運命に従わざるを得なかったはずだ）にて永遠の囚人となっていたのかもしれない、という考えもバーナードに浮かんだ。その結果あの哀れな娘は、ヴィヴィアン夫人との帰国という道すがら後ろを何度も振り返るも、救いに駆けつけてくれる騎士の姿を見つけないこともなく、自分が見捨てられたといやおうなく信じて、哲学に救いを求めざるを得なかったのだらう。哲学の勉強が彼女に内省という技を教え、自分が素晴らしく落ち着いたと彼女が思ったとしても、無理からぬところがあった。かつてバーデンで、あのエヴァーズ嬢がイギリスの伊達男に飽きているとゴードン・ライトが言ったことがあったが、ゴードンには分かるはずがない、とバーナードは内心思ったのだった。しかし今となっては、こんなことはすべて意味がなかった。そしてバーナードは、友人のあらを探そうという気分からできるだけ速ぎかった。ゴードンは婚約したのだ。そして我が批評好きの主人公は、この決心についてあらを見つけることができなかつた。それは素晴らしいことであり、友人が望んでいたことだった。きつと大いに彼のためになるだらう。バーナードは心から友人のために喜び、大事な先約によりイギリスを何度も訪れねばならないので、結婚式に出られないことをひどく残念に思った。

すでに述べたように、彼がニューヨークに着いた時には儀式はとつくに終わっていた。蜜月は陰り、結婚生活の仕事が始まっていた。バーナードはとうとうイギリスから急いで帰国した。汽船にとびきり上等の船室を確保していた友人が突然イギリスに留まらざるをえなくなり、切符を放棄したのだ。その友人が切符を譲ってくれ

たので、ロングヴェイルは大西洋の大波にいつもより少し優しく揺られるというこの機会をありがたく利用したのだ。それゆえ彼は二日前に知らされて乗船したが、それは彼の予定より、また彼がゴードンと会う予定と書いたより二週間も早かった。もちろんゴードンは、ブランシュが今もてなしの用意をしているところ——彼らは魅力的な家を持っていた——以外のところは考えなくてくれ、と書いてきた。しかしバーナードは、朝早く下船してホテルに赴いた。自分の歓迎を期待したくはなかったで、まずゴードンに報告に行き、その日の後の時間に荷物を持って戻ってこようと思っていた。船旅の汚れを落とした後、彼はホテルを離れて、初めて上陸した旅行者が地上を歩くのを楽しむように五番街を歩いた。心地よい秋の日だった。黄金のもやが立ちこめていた。小春日和というのだろうかと思つた。五番街の広い歩道には、深紅やオレンジや琥珀色の乾いた葉が散らばっていた。彼は歩きながら杖で落ち葉をはじき上げていった。落ち葉は動かされると、カサカサこそこそと音を立てた。それは彼の騒々しい幼年時代に同じ歩道で目の前の落ち葉を蹴り上げていた光景を思い出させた。あちこちさまよつた後でふたたび故国にいと実感するのは喜びだった。バーナード・ロングヴェイルは、生まれ故郷の町に挨拶をした。この地の明るさと快活さは帰還した息子に対する歓迎のように思われた。偉大な都市の中でもっとも初々しく若く気楽で善良なこの都市に対して、彼は愛情の動悸を覚えた。ゴードン家の戸口に立つた時、バーナードは主人の不在を告げられた。しかし彼は、夫人に会うために中に入った。彼女は一人で応接間にいた。外出しようとしていたかのように、彼女はボンネット帽をかぶっていた。彼女は彼に、嬉しそうに感情をあらわにした歓迎のそぶりをちよつと見せた。明らかに彼に会つてとても喜んでた。彼女が「向上した」とはありえる、とバーナードは思つた。そして彼女はたしかにこれまでになく美しかった。彼女が依然としておしゃべりであることはすぐに分かつた。彼女の話の質が良くなつていくかどうかは、これから分かることだら

う。

「まあ、ロングヴィルさん」彼女は声をあげた。「いつたいあなたはどこからおいでになったのですか。そして大西洋を渡るのにどれほどかかりましたか。三日ですか。それ以上であるはずはございませんわね。なぜって、あなたが二十日まで出航しないとゴードンが教えてくれたのが、ほんの先日でしたもの。お心が変わられたのですか。お心が変わられることがあるなんて、存じませんでしたわ。ゴードンは決して気が変わりません。でもそれは理由にはなりませんわね。あなたはゴードンとは全然似ておられないのですもの。男性であるという以外にあなたが似ておられると思ったことはありません。おや、何を笑っておられるのですか。私にどう呼んでほしいのですか。あなたは人間ですわね。神様ではありません。きっと神様と呼んでほしいんでしょう。その名はゴードンのためにとっておくべきだとおっしゃるのですか。きっとしばらくはそうしますわ。最後にあなたにお会いした時より、男性について私はずっとよく分かっています。男性がちっとも神様のようではないと思っておりますわ。だからあなたはいつも空から降りてこられる。その方が神様にふさわしいと思っておられるのね。あなたがバーデンに來られた時もそんな風でした。気がついたらあなたは私たちの真ん中に立っておられた。あなたが來られた晩のことを覚えておられますか。あなたはやって來られてゴードンの肩に手を触れられた。彼はちっと飛び上がりましたわ。今日あなたに会えば、彼はまたちよっと飛び上がるでしょう。実によく飛び上がりますの。私がいつも飛び上がらせているのです！ バーデンでの晩座っていた時のことや、あなたがおいでになって私をご覧になった時のご様子は完璧に覚えています。あなたとは、ゴードンより前にお会いしています。ゴードンより前にたくさんのことがあるのです。どうしてそんな風に私をご覧になったのですか。いつもあなたにお尋ねしようと思っておりました。ぜひとも知りたかったのです」

「理由はもつとも単純なものです」バーナードは言った。「あなたがあまりに美しかったからです」

「あら、そうではなかったわ！ あのご表情についてはよく分かっております。何か他のものでした。私について何かご存知であるかのような。一体何をご存知のことがあったのか、私には分かりません。私がまったく馬鹿だという以外に、私についてお知りになられることはありませんでした。本当に、あの夏バーデンの私はまったく馬鹿でしたわ。私がどんなに馬鹿だったか、お信じになれないでしょう。でも、私に話しかけられる前でしたのにあなたがどうしてそれをお分かりになったか、私には分かりません。私の話に出ていたのでしょうか。ひどく出ますものね。ヴィヴィアン夫人の影響力については、母はずいぶんがっかりしました。非常に多くを期待していましたが。でもヴィヴィアン夫人のせいではありませんわ。他の方のせいでした。あれからヴィヴィアンさんたちにお会いになりましたか。あの人たちはいつもヨーロッパにいます。パリに住みに行っていました。あなたがおいでになってゴードンにお話になったあの晩、その三年後に自分が彼と結婚するなんて思いもしませんでした。あなたもきつとそうでしょう。それが私を見に来る目的だったのですか。たぶんあなたには未来がわかるのでしょうか。私の未来を教えてくださいたいわ！」

「いや、それならたやすくお教えできませんよ」バーナードは言った。
「私に何が起ころのですか」

「特に何も。ちょっと退屈ではあるでしょう。世界でもつとも良い男と結婚した魅力的な女性の完璧な幸福です」

「まあ、何てひどい未来でしょう！」少し不機嫌にブランシユは声を上げた。「幸せにはなりたいですが、退屈は本当に嫌ですわ。そんなことをもう一度おっしゃれば、世界でもつとも良い男と結婚したことを、あなたは私

に後悔させるでしょう。私は幸せになるつもりですが、できれば絶対に退屈にはなりたくないのです」
「そんなことを言ったのは間違いでした」バーナードは言った。「なぜなら結局のところ、あなたのご主人のような優しい夫を持つことは、わくわくさせる場所があるに違いないからです。ゴードンの献身は、毎日新しい形を取り、新たな優しさを生み出すことができます」

ブランシュはちよつと彼を見たが、普段なら彼女が意識しておく間まが短かった。

「夫はとても優しいんです」彼女は静かに言った。

彼女がそう言うが早いか、ゴードンが入ってきた。彼はバーナードを見て一瞬立ち止まり、妻を見て、顔を赤らめ、喜びの率直な大声を上げながら、両手で友人をつかんだ。ずいぶん久しぶりにバーナードに会ったので、非常に心動かされているように見えた。微笑みながら立ち、手をにぎりしめ、バーナードの目を見ながら、しばらく話すことができなかつた。バーナードの方でもとても喜んでいた。ゴードンの正直な顔をまたのぞき込み、彼の男らしい手を握り返すのは、彼にも嬉しかった。それにゴードンは元氣そうで、幸せそうだった。それを見てさらに嬉しかった。彼らがかつての友情を静かにあたため直していたわずかな間に、柔軟な理解力を持つバーナードは、自身の喜びを意識するともにくつつかのこを見て取った。ゴードンは元氣で幸せそうだったが、老けたように見え、以前より落ち着いており、人生の刻印が押されているようにも見えた。何かが彼の身に起きたかのように、また実際何かが起きただろうと思われた。バーナードは友人の目に炎が潜んでいるのを見た。その目は、ブランシュの印象をバーナードの目に問うているように、また熱心に問うている一方で判断を下さないように願っているように見えた。ゴードンが男らしい誠実さで彼女のそばに立ち、その誠実さを際立たせているという事実を受けて、バーナードはブランシュが以前と同じ気取った男たらしであると見て取った。バーデンで

なら、ゴードン・ライトが彼女との結婚を夢見るなどということ、バーナードはひどい冗談として扱っただろう。一言でいえば、それは彼が最初に受けた印象、すなわち不似合いな結びつきだったのだ。こうしたことすべてを、とりわけ分別を欠いた喜びの感情というかなり不透明な媒体を通してであったがゆえに、一分の半分の間、バーナードが見て取るのは大変だった。そしてこの瞬間の彼の印象は、より広い機会によって確かめられるという運命にある限りにおいて価値があったのだ。

「僕らが予想していたより、君は少し早く来たね」ゴードンは言った。「でもなおさら来てくれて嬉しいよ」

「かなり危なかったわ」ブランシュは言った。「良い印象を与えようと思ったら、前もって知らされるべきよね」「おやブランシュさん」バーナードは言った。「僕に関する限り、あなたはずっと以前にあなたについての印象を与えてくださいました。あなたが効果を狙っておられたとしても、今日で何かが付け加わったとは思いませんよ」

彼らは暖炉の前の大きな敷物の上に立っていた。ブランシュは、バーナードのこの言葉を聞きながら、腕を上げて、巻き髪からほつれた毛を触っていた。

「彼女は効果をすぐに整えるよ」ゴードンは穏やかに笑いながら言った。「効果はすばやく続いていくよ!」

ブランシュは手を、やや前かがみになった頭のうしろに置いた。彼女のむき出しの腕が垂れ下がった袖から現れた。かがめた額の下から上向きに見ながら、彼女は二人の観客に微笑んだ。彼女の夫はバーナードの腕に手を置いた。

「彼女は美しくないかい」彼は声を上げた。少なくともこの点については確かだということに一種の穏やかな喜びを覚えつつ、彼は言った。

「すばらしく美しい！」バーナードは言った。「君が帰ってくる半時間前に、彼女にそう言ったよ」

「おや、その時に来るべきだったな！」ゴードンは声を上げた。

彼女の魅力についてこのようにあけすけに話されることに對してブランシユが平気だったのは明らかだった。二人の男性が特別に敬意を払っているというそぶりが、彼らの言葉の露骨さを和らげていたからだだった。しかし彼女は礼儀正しくも苛立ち、ちよつとふくれつ面をし——それは彼女がこれまでにしたどんなことよりも彼女に似合っていた——、お二人が私についてお話しされたければどうぞご自由に、でも私が部屋を出ていくまではお待ちいただきたいわ、と言いつ放った。こうして彼女は出ていったが、荷物を取りに使いをやつてここにお留まりください、とバーナードに言い残した。また彼女は、あなたの住まいの手配をするためにすぐに指示をだします、とも約束した。バーナードは、彼女が通れるようにドアを開けた。彼女は戸口に立つ彼に魅力的なお辞儀をしたが、彼の方は顔に彼女の微笑みの反映をとどめてゴードンに向き直つた。ゴードンは彼を見ていた。彼女が彼女の何をどう思っているか、ゴードンはぜひとも知りたがっているのだ。自分が愛している女性を人がどう思っているか知りたがるのは、ゴードンの奇妙な癖であつた。しかしバーナードは今ならその癖を十分に満足させられると思つた。ゴードンがしつかりと結婚しているのを見て、非常に嬉しかったのだ。

「楽しい人だね」バーナードは、また友人と握手しながら、礼儀正しくあいまいに言つた。

ゴードンは彼をちらと見て、少し顔を赤らめながらまつく窓の外を見た。それを見たバーナードは、これは、友人がバーデンで留守をして戻つてきた後で、彼自身がアンジェラ・ヴィヴィアンを言い表そうとして使つた言葉であつたことを思い出した。ゴードンは分かつていた。自分の状況の奇妙さを分かつていたので。

「もちろんびつくりしただろう」まだ窓の外を見ながら、少しして彼は言つた。

「何にだい」

「僕の結婚だよ」

「そうさな」バーナードは言った。「何だつて僕には驚きさ。僕はとても憶測好きな人間なんだ。あらゆる種類の考えが頭に浮かんでくる。それでいて、もっとも簡単なことが起きると、僕はいつもかなりびっくりするのさ。僕は夢想の中に生きていて、人がするいろいろなことに絶えず起こされているんだ」

ゴードンは目を窓からバーナードの顔に、そして彼の体全体に向けた。

「君は起きているのかい。でもまた眠ってしまうんだな！」

「すぐに寝てしまうんだ」バーナードは言った。

ゴードンは彼の頭から足まで見て、微笑みながら首を振った。

「君は変わっていないな」彼は言った。「君は未知の土地を旅してきた。おそらくあらゆる種類の冒険をしてきただろう。でも君は、僕が以前知っていたのと同じ君だ」

「すまないね！」

「君は以前と同じく自己を表現する、いや自己を間違つて表現している」

「おや、たとえば僕が変わっていないとしても」バーナードは言った。「僕にはそんな大事な技術を手放す余裕はないな」

「君を全体として考えると、君が同じで嬉しいよ」ゴードンは素っ気なく答えた。「でも、僕の部屋にもぜひ来てくれたまえ」

* ここに訳出したのはヘンリー・ジェイムズ (Henry James, 1843-1916) の第四番目の長篇小説『信頼』(Confidence 一八七九年) 第十五章と第十六章である。第一章から第三章までは『英文学評論』第七十九集(京都大学大学院人間・環境学研究所英語部会、二〇〇七年二月)に、第四章から第八章までは『文学と評論』第三集第六号(文学と評論社、二〇〇八年十二月)に、第九章から第十四章までは『英文学評論』第八十一集(二〇〇九年二月)に掲載された。

註

- ① ウース川——the Oos バーデンはこの川を臨む。
- ② ファージンダ——farthing 英国の小銅貨で、四分の一ペニー。一九六一年廃止。
- ③ オランダ亭——the Hôtel de Hollande 四千mの広さがあるゾフィエンパーク内に立地するホテル。現在は四つ星ホテル。
- ④ ポケットを焦がして穴を開けようとしていた——burning a hole . . . in his pocket (金が) (人に) 買い物をする気にならせる。すぐに使われてしまふ。
- ⑤ 善きサマリア人——good Samaritan 苦しむ人の真の友 『ルカ伝』第十章三〇—三七行。
- ⑥ ローザンヌ——Lausanne スイス西部のLeman湖(Geneva湖)に臨むVaud州の州都。
- ⑦ びっくり箱——Jack-in-the-box ふたを開けると人形やビエロの頭などが飛び出すびっくり箱。
- ⑧ 自信——confidence 本書のタイトルでもある。ゴードンは自信を得たと言っているが。誰の信頼も自信も揺らぐのが本小説の展開である。
- ⑨ 彼の騒々しい幼年時代に同じ歩道で目の前の落ち葉を蹴り上げていた光景——本小説の作者ヘンリー・ジェイムズの幼年期を彷彿とさせる描写。ジェイムズは一八四三年ニューヨークのワシントン・プレイス二十一番地に生まれ、その後父に連れられてヨーロッパへ行くものの、四五年には帰国している。一家は、四七年夏にはニューヨークのワシントン・スクエアに住み、四八年から五五年にかけて十四丁目の家を買って住んでいる。ジェイムズの自伝第一巻『ある少年の思い出』(A Small Boy and Others, 1913) には、幼年期に過したニューヨークの思い出が詳しく書かれている。

⑩ 彼自身がアンジェラ・ヴィヴィアンを言い表そうとして使った言葉——本書第十四章において、バーナードは同じ言葉を言っている。